

PROGRAM

ワーグナー:

楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲

Richard Wagner: "Die Meistersinger von Nürnberg" Prelude

サン＝サーンス:序奏とロンド・カプリッチョーソ★

Camille Saint-Saëns: Introduction et Rondo Capriccioso op. 28

サラサーテ:カルメン幻想曲★

Pablo de Sarasate: Fantaisie sur "Carmen" de Bizet op. 25

序 奏 アレグロ・モデラート Allegro moderato

第1楽章 モデラート Moderato

第2楽章 レント・アッサイ Lento assai

第3楽章 アレグロ・モデラート Allegro moderato

第4楽章 モデラート Moderato

— 休 憩 — Intermission

ブラームス:交響曲 第1番 八短調 op. 68

Johannes Brahms: Symphony No. 1 in C minor, op. 68

第1楽章 ウン・ポコ・ソステヌート - アレグロ Un poco sostenuto - Allegro

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート Andante sostenuto

第3楽章 ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ Un poco Allegretto e grazioso

第4楽章 アダージョ - アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ

Adagio - Allegro non troppo, ma con brio

★ヴァイオリン:松山 冴花

指 揮:宮本 文昭 Fumiaki Miyamoto, Conductor

ヴァイオリン:松山 冴花 Saeka Matsuyama, Violin

管 弦 楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2010 9/23(木・祝) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

平成22年度文化庁芸術拠点形成事業



3分ですぐわかる 今回の聴きどころ

重厚なるオーケストラの響きと、華麗なるヴァイオリン・ソロの妙技

大編成のオーケストラの厚い響きが朗々と歌われる。それが「マイスタージンガー」前奏曲だ。管楽器の編成が大きいので、大編成の交響曲を演奏する時に一緒に演奏されたり、ワーグナーだけの演奏会で取り上げられたりするが、今回のような一般的な演奏会で序曲的に演奏されることはまれだ。ワーグナーの音楽にしては明るく前向き、そして旋律の豊かな作品で、オーケストラの腕の見せ所満載。

続くヴァイオリン・ソロをメインにした2曲も色彩豊かな作品。作曲家サン＝サーンスと名手サラサーテとの友情から生まれた「序奏とロンド・カプリッチョーソ」、それにサラサーテ自身の編曲による「カルメン幻想曲」。フランスとスペインの出会いによる傑作だ。

第4楽章の前向きな音楽が希望を与えてくれるロマン派交響曲の傑作

構想20年。交響曲を書きたいと願い続けてきたブラームスが、円熟の時期を迎えてようやく完成した最初の交響曲。それがこの第1番である。第1楽章冒頭のティンパニの連打に始まる重苦しい雰囲気の世界が、次第に明るさを持ち始め、最後は力強く未来へ向かって進み出す、そんな「暗～明」への流れをはっきりと持った交響曲。

規模が大きいだけでなく、第2楽章ではコンサートマスターのソロとホルンのかけ合いがあったり、オーケストラの楽器がソロで活躍する場面もたくさん出てくる。そして第4楽章では、ベートーヴェンの「第9」の第4楽章の「歓喜の歌」のメロディにも似た明るい旋律が堂々と歌われる。

片桐 卓也(音楽ライター)

PROGRAM NOTE

演奏をより深く楽しむために—— 曲目解説

片桐 卓也(音楽ライター)

ワーグナー: 楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲

リヒャルト・ワーグナー(1813~1883)が「トリスタンとイゾルデ」に続いて1867年に完成した「ニュルンベルクのマイスタージンガー」は、中世ドイツのニュルンベルクを舞台に、実在したハンス・ザックスという人物を取り上げ、当時流行していた「歌合戦」を題材に描いた喜劇的な楽劇(オペラ)である。中世の騎士の伝統を継ぎ、様々な職人たちが歌を披露してその腕前を披露するという「歌合戦」だが、詩の美しさ、それに歌の素晴らしさをともに持ち合わせないと勝利は難しい。その歌合戦の情景を、様々な人物の想いをからめて描いた作品である。

この頃のワーグナーは「ニーベルングの指環」を中断して「トリスタンとイゾルデ」を書き、さらにこの作品に取り組んでいた。ワーグナーの音楽的な特徴を代表する要素として知られる「指導動機(ライトモチーフ)」の使い方も、この頃には十分に成熟していて、この「マイスタージンガー」前奏曲の中でもはっきりと分かるように楽劇の様々なシーンの動機が登場している。冒頭の堂々とした音楽は「マイスタージンガー(親方歌手)の動機」として知られるものだし、その後「芸術の動機」「愛の動機」などが登場して来る。この前奏曲はいわば全体の音楽の予告編のような存在なのだ。

しかし、ひとつの楽曲としても充分に聞き応えがあるのは、やはりワーグナーの成熟したオーケストレーションと、すべての動機をうまく連携させる音楽的な力のなせる技だ。

サン=サーンス: 序奏とロンド・カプリッチョーソ

フランスの作曲家カミーユ・サン=サーンス(1835~1921)は「動物の謝肉祭」や交響曲第3番「オルガン付き」などの名作を書いたことで知られる。サン=サーンスは

スペイン出身のヴァイオリニスト、パブロ・サラサーテと親しくなり、一緒に演奏旅行もするほどだった。ふたりの協力によっていくつものヴァイオリン曲が誕生した。そのひとつがこの「序奏とロンド・カプリッチョーソ」であり、もうひとつが有名なヴァイオリン協奏曲第3番(作品61)で、いずれもサラサーテが初演を担当した。

「序奏とロンド・カプリッチョーソ」は1863年の作品。「序奏」の部分は、静かな情熱を秘めた叙情的な音楽で、ヴァイオリンの音色の美しさを聴かせる部分。その後「ロンド・カプリッチョーソ」の部分となる。カプリッチョーソとは「気まぐれな」という意味のイタリア語だが、飛び跳ねるようなリズムの音楽がスペイン的な雰囲気を持っているように感じる。とても情熱的な音楽である。

サラサーテ: カルメン幻想曲

スペイン出身のヴァイオリニスト、パブロ・デ・サラサーテ(1844~1908)はバンブローナ生まれ(あの牛追祭で有名な街)。神童として知られ、13歳でパリ音楽院を卒業してしまうなど、早くから才能を発揮し、演奏活動を始めた。サン=サーンスと共に演奏旅行に出かけたことも話題となった。

彼は演奏家であると同時に作曲家でもあり、特に「ツイゴイネルワイゼン」とこの「カルメン幻想曲」が有名だ。前者はロマ(ジプシー)の音楽をベースにしたもので、後者はフランスの作曲家ビゼーの遺作歌劇「カルメン」の音楽を、サラサーテが独自に編曲して、ひとつの作品にまとめたもの。いずれもヴァイオリンのテクニックをふんだんに使うスタイルで書かれている。

「カルメン幻想曲」は1883年の作品。オペラ「カルメン」の初演は1875年なので、10年も経たないうちにこの編曲作品が登場したことになる。スペインのセヴィリアを舞台にしたオペラなので、サラサーテにとっても近い音楽だったのかもしれない。ヴァイオリンのテクニックをふんだんに盛り込み、「カルメン」の名場面の音楽(「ハバネラ」など)を巧みにまとめた編曲作品である。

ブラームス:交響曲 第1番 ハ短調 op.68

ドイツの作曲家ヨハネス・ブラームス(1833~1897)はハンブルク生まれで、若い時代から才能を発揮し、ピアニストとして活躍していた。ハンガリー出身のヴァイオリニスト、レーメニと演奏旅行に出かけ、その過程で作曲家シューマンと出会った。22歳のブラームスはシューマンの「マンフレッド序曲」を聞き、交響曲を書こうと思ったと言われる。しかし、ベートーヴェンを超えるような作品を、という想いが強く、満足するような作品は出来なかった。

ブラームスは1862年からウィーンに定住して、作曲活動に本腰を入れている。そして「ハイドンの主題による変奏曲」など大規模な管弦楽作品を発表した後、いよいよ本格的に交響曲の作曲に取りかかった。そして1876年、43歳となったブラームスはようやくこの第1番の交響曲を完成した。初演後も改訂を続け、現在の形で出版されたのは1877年だった。当時の名指揮者であったビューローは「これはベートーヴェンの第10番だ」と語って、作品を高く評価した。

第1楽章 ウン・ポコ・ソステヌート〜アレグロ

ティンパニの連打、そして上行する弦楽器と下行する管楽器の交錯する序奏部分(ハ短調)。この中に含まれている半音階的な進行は、交響曲全体を貫く重要なテーマとして、各所に登場する。重苦しい序奏部分が終ると、アレグロの主部が登場する。激しい感情を表した力強い音楽がソナタ形式で展開され、最後はハ長調の静かな和音で終る。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート

叙情的な緩徐楽章。弦楽器の優しい主題を中心とする複合3部形式。オーボエ、ホルンのソロ、そして最後にコンサートマスターの演奏するヴァイオリン・ソロが登場して、美しい歌を歌う。激しい闘争にも似た第1楽章に対して、安らぎの楽章とも言える。

第3楽章 ウン・ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソ

第4楽章へつながる間奏曲のような短い楽章。しかし、クラリネットやホルン、フルートなど管楽器の美しいアンサンブルが登場する。中間部はやや暗く、高ぶる音楽。オーボエのソロも登場。グラツィオーソ(優雅に)という表情記号が活かされた美しい楽章だ。

第4楽章 アダージョ〜アレグロ・ノン・トロポ・マ・コン・プリオ

第3楽章から一転して、重く暗い序奏部が登場する。それが次第に力を増していくが、ホルンの牧歌的な主題が登場して、だんだん明るい雰囲気に変化する。そして明るく堂々とした主題(「歓喜の歌」に似ていると言われる)が登場して、高らかに歌い上げられ、力強い終わりを迎える。